

森の相談室

鹿児島県立大島高等学校 三年 内野 真緒

今年の春、中学生の「つむぎ」は遠くの街から奄美に引っ越してきました。始業式が始まると、つむぎの新しい学校生活が始まります。

「はっ、はじめまして。つむぎと言います。よろしくお願ひします。」

人見知りの性格のせいか、緊張で声が少し震えていました。奄美に来たことはもちろん、転入をすることも初めてでした。新しい友達、新しい場所での生活はすべてが驚くことばかりで、戸惑うこともたくさんありました。

「つむぎちゃん、どこから来たの。」

「部活、何してたの。」

クラスでは質問が飛び交い、つむぎはあつという間に注目を浴びることになりました。恥ずかしがり屋なつむぎでしたが、少しずつ話せるようになり、友達も増えていきました。皆が話しかけてくれるだけで、転入することへの不安も少しずつなくなっていきました。優しい友達がたくさんいることにとっても満足していました。

しかし、つむぎには心に引っかかることがありました。

学校は楽しいけれど、なかなか馴染めていないな。コトバも文化も違う。自分だけが浮いているような不安が、ふつと湧いてきます。クラスで話しているときや友達と遊んでいるときでも、ふと我に返ったときに、暗い気持ちがつむぎの心を曇らせていきました。

ある日の放課後、つむぎはいつものように帰り道を歩いていました。普段は一緒に帰る友達がいるのですが、この日はたまたま一人で帰ることになりました。つむぎの家は、静かな小川を越えた先の、豊かな森に囲まれた場所にあります。いつものように小川を渡ってしばらく歩いていると、足元に小さな紙が落ちていたのを見つけました。

「落とし物かな。」

そう言って、つむぎは紙を拾いました。そこには、見たことのない地図と、小さな文字で「森の相談室」と書かれていました。地図をよく見てみると、今つむぎがいると思われるところから、森の奥の目的地までのルートが丁寧に描かれていました。この森の先には何が待っているのだろう。なぜかその場所に行かないといけないような気がしてきます。気が付くと、つむぎはその地図のルートに沿って歩いていました。小川の横を通り、夕日で黄金色に輝いた森を抜けていきます。森の中は少しひ

んやりとしていて、たくさん鳥の鳴き声や、見たことのない植物が多く生えていました。美しい自然に心躍らせながら歩いていくと、一本の大きなガジュマルがそびえ立つ広場に出ました。耳を澄ますと、

「ホホッ、ホホッ。」

と愉快な一羽の鳥の声が聞こえてきます。どうやらその声は、ガジュマルの木から聞こえてくるようです。つむぎが声のする方へ踏み出したそのとき、いきなり強い風が吹いて、大きなガジュマルの枝をワサワサと揺らししました。ようやく風が止み、つむぎは恐る恐る目を開けると、幹の上にメガネを付けた一羽のフクロウが座っていました。すると突然、

「森の相談室へようこそ。あなたがつむぎさんですね。ホホッ。」

とフクロウが話し始めました。

「私はリュウキュウキノハズクのムーンと言います。あなたの悩みを解決しますよ。ホホッ。」

と言います。そのフクロウはメガネを掛け直しながら、優しくほほえみかけました。つむぎは、ムーンという名前に聞き覚えがありました。それはまだつむぎが幼かった頃、つむぎの祖母から聞いた不思議なフクロウの話でした。

「つむぎ、奄美にはね、ムーンさんという名前の不思議なフクロウがいるんだよ。」

つむぎの頭の中で、祖母の優しく話す声が蘇ってきました。祖母が言うには、そのフクロウは困っている人や悩みを抱えている人しか会おうことが出来ないと言われている、幻のフクロウだそうです。つむぎは勇気を出して、ムーンに話しかけました。

「ムーンさん、悩みだったら何でも聞いてもらえますか。」

「もちろん、聞いてあげるよ。ホホッ。」

とムーンは答えました。するとつむぎは、これまで感じていた不安なことやなかなかクラスに馴染むことができないことなどを素直にムーンに話し始めました。話が終わると、ムーンはゆっくりとつむぎに言いました。

「つむぎさん、奄美の自然は好きかね。」

「私もよらないムーンの言葉につむぎは、」

「えっ、あっ、はい、好きです。」

と少し恥ずかしそうに返しました。ムーンはそれは良かったと満足そうな顔を見せて、語りだしました。

「奄美の自然は本当に豊かだ。この森だって、見たことのない形の植物やカラフルな鳥、毒を持ったものも住んでおる。彼らはそれぞれ、違った特徴をもっているじゃろ。」

それぞれの生き物がそれぞれの個性を光らせて生きて
いるのじゃ。この私だって、リュウキュウコノハズクにしか
ないこの声を誇りに思っておる。ホホッ。」

そう言って、ムーンは胸を張りました。

「つむぎさん、人間の世界も同じ事じゃ。無理に周りの
人に合わせるのではなく、お互いに個性を認め合えば
良い。自分にしかないものを見つけて、誇りと思えば良
いのじゃ。考え方が周りと違うことも、異なった角度か
ら物事を見ることができるといいう長所なのではないか
ね。ホホッ。」

とムーンは頭を少し傾けて、メガネの縁からつむぎを覗
きました。つむぎは、

「自分にしかないもの…。」

と呟くと、今までの心の曇りがすっと消えていくように
感じました。「自分にしかないものを見つけて、光らせ
る」ムーンの言葉は、つむぎの心で温かく広がっていきま
した。

「ムーンさん、ありがとう。」

と大声で言うのと、そこにはムーンの姿や大きなガジュマ
ルの木も消えていて、つむぎは小さな地図を拾った小
川の近くで立っていました。

次の日、つむぎはいつものように学校へ向かいます。昨

日までとは違って、自然と笑顔が溢れ出します。昨日
の出来事は夢だったのかなと思いつながらポケットに手を入
れると、なんと、昨日見つけた小さな地図が入っていました。
よく見てみると、昨日まではなかったフクロウの
かわいらしいスタンプが押されています。小さなサブライ
ズに、つむぎはくすっと笑いました。つむぎは新しい奄
美の地で、「自分にしかないもの」を探す探検に出かけ
ます。新しい思い出をつむぐためにー。